巻頭言

医療者として生成 AI との向き合い方を思索する

理事　瀬　戸　　親

昨年まで大して世の中の話題に上ることの無かった生成 AI のニュースを，今年になって急に見聞きするようになった. 生成AI（generative artificial intelligence）とは, インターネット上に溢れる多くの情報やデータをコンピュータが深層学習し，クライアントの求めに応じて新たに文章や画像，動画を作り上げる人工知能のことを指す．私がその存在を知ったのは chatGPT が切っ掛けだった．chatGPT とは生成 AI による対話型文章作成アプリのことだが，当初は何か特殊なコンピュータで無ければ利用できないのだろうと思っていた．しかし今年度の初めに作文を提出する機会があって，その締め切りも迫っていたことから物は試しに chatGPT について調べてみたところ，容易にアプリをダウンロードできることが判明した．ウイルス感染のことも脳裏をよぎったがウイルスチェックソフトは導入済みだったので，恐る恐るダウンロードして，「医学部学生の臨床教育に対する考え方とは？」と打ち込んでみた．するとどうだろう，いくつかの項目別にあっという間に文章化され，文字数は 500 字を超えた．考察すべき項目だけ参考にさせてもらい，あとは自身の意見を記述し，締め切りに間に合うことが出来て安堵したが，それ以上に chatGPT の能力に驚いた.

つい先日（2023 年 4 月末）開催された G7 デジタル・技術相会合では，AI ガバナンス（AI をめぐる倫理，法的課題およびセキュリティーを適切に管理する手法・仕組み）の推進を掲げ，信頼できる AI の国際的な技術基準の策定を目指し，民主主義や人権・基本的人権を尊重するアクションプランの共同声明を出した．ただし，生成 AI に対する G7 各国の対応は必ずしも足並みが揃っているとは言い難い．一方，企業の多くは，生成 AI は業務の効率化への利便性が高いとして導入に積極的のようであるが，個人情報の流出や著作権侵害といった懸念は少なからず抱いているようで，今後，生成 AI は多方面に影響を与えることは必至であろう.

中央病院医学雑誌の巻頭言なので医学論文について話を戻すが，論文投稿における生成 AI の影響は測りしえないと思われる．論文の体裁を為すには通常，「表題」「緒言」「対象と方法」「結果」「考察」「結語」と続くが，特に「考察」の部分で著者がどのように考察するかは非常に重要である．結果に基づいて考察の助けになるものが多くの出典であるが，著者自身が過去の出典を紐解くことなく生成 AI を利用して，あたかも自身の意見のように記述する怖れは大いにある．本来，論文はオリジナリティが求められるものなので，盗用や剽窃（ひょうせつ；かすめ取ること）があってはならない．剽窃検知ソフトなるものまで登場しているのはそのためである．本誌に

投稿される医師をはじめとする多くの職種の方に対し，あらためて生成 AI との向き合い方，その利用方法を考えていただく機会とし，校閲，編集する立場の方も引き続きクオリティの高い医学誌になるよう尽力されることを切にお願いしたい．

この先も生成 AI をめぐる不安や問題は尽きないだろうが，例えば原子力が“もろ刃の刃”でありながら人間社会が受け入れざるを得なかったと同様，生成 AI も甘んじて享受しなければならないだろう．人が作った文明は自ら拒絶できないと考えるからである．その代わり，生成 AI では成り立たない人や社会の活動の場を見出し，今後いかに盛り立てるかということが重要なのだと思う．例えば囲碁や将棋，スポーツ，音楽コンサートや演劇，漫才なんかはコンピュータが主役になっても誰も見向きもしないと思う．

我々医療の場においても生成 AI はあくまでも仕事の脇役であり，これからも医療者と患者が主役で，借り物ではない自身の思いから発する言葉や笑顔，パフォーマンスで触れ合うことが出来れば良いと考える．